

第4回桃山学院大学図書館書評賞受賞作一覧

〔優秀書評賞〕

中村 那於 (社会学部1年次生)

新田 次郎 『槍ヶ岳開山』(新田次郎全集:第18巻所収) 新潮社 1975年

〔佳作〕

木谷 友子 (文学部3年次生)

北村 薫 『スキップ』 新潮社 1995年

中川 洋子 (文学部3年次生)

八木 宏美 『違和感のイタリア:人文学的観察記』 新曜社 2008年

根来 厚志 (国際教養学部2年次生)

伊坂 幸太郎 『終末のフール』 集英社 2006年

松谷 彩可 (国際教養学部1年次生)

諏訪 哲史 『アサッテの人』 講談社 2007年



〔総合講評〕

図書館長 経済学部教授 滝田 和夫

図書館書評賞は今年度で第4回目である。今年度の応募作品数は 去年の 121 篇に比べて大きく減少し、50 篇であった。減少の原因として、台風襲来のために応募締切日前日に大学が臨時休校になったこともあるが、基本的には宣伝が十分ではなかったことがあると思われる。次年度に向けての反省点としたい。選考は各学部から選出されている図書館委員5名の合議によって行われ、優秀書評賞1篇、佳作4篇が決定された。残念ながら今年度も、最優秀書評賞に該当する作品はなかった。

今回も、応募要件を充たさないために審査の対象外となった作品がいくつかあった。本文が 40 字×40 行の設定になっていないもの、800 字以上 1,600 字以内の制限を越えるもの、あるいは本学図書館に所蔵されていない図書を対象としているものなどである。これらの要件は応募要項にはっきりと書いてあるので、よく読んで応募していただきたい。

書評においては、本の内容が的確に要約され、その本のよい点や悪い点が具体的に明示される必要がある。今回は内容紹介だけのものはさすがに少なく、殆どの応募作品には内容紹介に加えて何らかのコメントが付けられていた。しかし、紹介に大半を費やし、単に「面白かった」「役に立った」という類のコメントを一言付けただけのものも少なくなかった。その本のどこがどのように優れているのか、あるいは劣っているのかを自分の言葉で具体的に・説得的に指摘しなければならぬのである。その際、書評全体の構成を十分に検討し、わかりやすく適切な文

章で表現することも非常に大切である。

今回の入選作のうち優秀賞、『槍ヶ岳開山』は、審査員の評価が最も高かった。これは素直で歯切れのよい短文を主体に書かれており、読みやすく明快な作品である。文に無駄がないし書評全体のバランスもよい。原作は数多くの小さな物語から構成されているが、細部にとらわれずに小説全体の流れが要領よく紹介されている。また、ストーリーの面白さや山の描写のすばらしさといった原作のもつ魅力が、焦点を絞って具体的・説得的に示されている。但し、推敲が十分とは言えず、文章の完成度という点では問題が残る。

佳作4篇中、相対的に評価が高かったのは『スキップ』と『終末のフール』の書評であった。この二人の受賞者は、いずれも過去の書評賞の受賞者でもある。『スキップ』の受賞者は今回で3年連続の受賞であり、また、『終末のフール』の受賞者は今回で2年連続の受賞である。二人ともなかなかの実力の持ち主だということである。

さて、その3年連続受賞者の作品、『スキップ』の書評だが、これはとてもよく作りこまれた上質な作品である。推敲が十分に重ねられており、緻密に構成された完成度の高い作品である。テーマの捉え方も適切といえよう。しかし、説得力の点で物足りなさが残った。この書評には、原作の中の美しい言葉や気の利いた表現がところどころにちりばめられている。そのこともあって、技巧的で美しい作品に仕上がってはいるのであるが、その反面、評者の肉声が聞こえにくいという惜しい結果を招いたのではないと思われる。

もう一つの2年連続受賞者の作品、『終末のフール』の書評は、それとは対照的に、自分の言葉で飾らず素直に書かれており、その分かりやすくて説得力のある

作品である。特に、原作の状況設定を自分の大学生活と重ね合わせているあたりを読むと、思わずニンマリとさせられる。構成もよく考えられている。しかし、推敲が十分ではなく、文章ミスや不要と思われる語句も散見される。また、書評としては感想文にやや近いところも気になるところである。

次に、『違和感のイタリア』の原作は、イタリアとイタリア人を理解するためのいくつかの話題を綴り合せた「モザイク画」(原作 p.12)のような作品である。そのため、原作それ自体必ずしもまとまりがよいとはいえず、その影がこの書評にも投影されて若干散漫な印象を与えている。しかし、評者がポイントを思い切って絞ることによって、それなりにまとまりのある書評に仕上げているところは評価できる。また文章の完成度も高く、内容も概ね正確に理解されており、受賞に十分値する作品である。

最後に、『アサツテの人』の原作はやや難解な小説だが、評者はその内容をほぼ正確に理解して紹介している。文章の完成度は高く、書評としての体裁もよく整っており、いい作品である。しかし、この書評には、説明不足のためにわかりにくい箇所もある。例えば、叔父の「定型化されたアサツテ」がチューリップ男の「無作為的なアサツテ」と対比されるが、「チューリップ男」とか「無作為的なアサツテ」とは一体何のことか、この書評を読んだだけではわからない。字数にまだ余裕があるのだから、もう一工夫欲しかった。

今回の受賞作は、最優秀賞作品がなかったとはいえ、いずれも実力を感じさせる力作揃いであった。また、選外となった応募作品の中にも、あと一歩と惜まれる作品が少なくなかった。今回応募された諸君も、またされなかった諸君も、さらに研鑽を積んで、来年は一層審査員をうならせる作品を提示されるよう期待したい。

〔優秀書評賞〕

新田 次郎 『槍ヶ岳開山』

中村 那於 (社会学部1年次生)

本書は伝記小説である。槍ヶ岳開山のシーンから始まり、そこから主人公である岩松の過去から物語は進んでいく。真面目な米屋の手代である岩松は運悪く大きな一揆に巻き込まれてしまった。そこで彼は誤って最愛の妻であるおはまを槍で殺してしまう。死の瞬間、岩松が見たおはまの表情は憎悪にみちた顔だった。彼は彼女の最期の表情に悩み苦しみながらも許しを乞うために生きていく。

彼は一揆に荷担したという罪で、商人の弥三郎、一揆で両親を失った徳助と共に村から逃げる。弥三郎はその後商人となったが岩松は徳助と共に出家をし、播隆という戒名を与えられる。その後寺を離れて念仏行者となり、三年間の修行を終えた播隆は、和尚に勧められて初めて笠ヶ岳再興として山に登る。そこで彼は頂上でおはまの幻覚を見て、山に登ればおはまに会える、許しをもら

えると感じ、最終的に猿も登れないという槍ヶ岳開山を決意する。しかし凶作の中、開山することは非常に困難であった。

一心不乱に生きれば死ぬまでにおはまに許してもらえると悟った播隆の生き様は決して楽なものでは無かった。瞑想する度におはまのあの憎悪に満ちた顔の意味を考え苦悶する彼を見ていると私は、人は得てして辛い事や厳しい環境に我が身を置くことで救われると信じてしまうのではないだろうかと思った。

この本で注目したいのが播隆と共に逃げた商人の弥三郎である。播隆に出家を勧めたのは彼であり、支援も行う。どうしてそこまでして播隆に関わっていくかという彼はおはまの死に関する重大な秘密を知っていた。では何故彼は苦しむ播隆に話さないのか、終章最後の数ページ、時間を忘れて何度も読み返してしまう。

そして本書に引き込まれる理由は、素晴らしい山の描写である。事細やかに山の様子が書かれていて読んでいると目の前にその風景がはっきりと見えてきてまるで私も登っているかのように感じてくるほどであった。美しく壮大な山の姿と恐ろしく厳しい山の天候が怖いくらいに読み手に伝わってくるのは作者が山をこよなく愛しているからであろう。

〔佳作〕

北村 薫 『スキップ』

木谷 友子 (文学部3年次生)

本書は、北村薫によって「時と人」をテーマに描かれた三部作の第一作目となる SF 小説である。

主人公の一ノ瀬真理子は17歳女子高校生。雨で中止になった体育祭の日、自宅でレコードを聴きながら眠りに落ちた。目を覚ますと彼女は42歳の高校教師、桜木真理子になっていた。一瞬にして、25年もの時が「スキップ」してしまったのだ。鏡に映る自分の姿に、変わり果てた彼女を取り巻くすべてのものに、真理子は戸惑い嘆き絶望してしまう。しかし、母親から意地っ張りと呼ばれた彼女のモットーは「嫌だからやろう」。自分の父親ほどの夫、自身と同年である高校生の娘に助けられながら、17歳の心のままで国語教師・桜木真理子としての未知の生活に自ら立ち向かっていく。時に奪われてしまった沢山のものをいとおしみながら、手探りでも自分の生きてきた軌跡を信じて彼女は前に進む。やがて、自分が失ったものはもう二度と戻らないと悟る。真理子は運命を受け入れ、今を懸命に生きる決意をする。そして、未来の自分が選んだ夫の隣へ頬を染めて歩み寄っていく。また、恋から始まる。

本作品のポイントは、主人公が「人生の早送り」に見舞われるという設定それ自体がテーマではないということにある。物語の中で、主人公が本当に時に弄ばれてしまったのか、あるいは記憶の欠落によって起こった障害であるのかは最後まで明らかにならない。だがいずれ

にせよ、失った25年間は決して戻ることはない。どれほど理不尽に過ぎ去っても、どんなに抗ったとしても、人は時を取り戻すことはできない。時はただ積もっていくだけである。単なるタイムスリップではない、というリアリティや時の持つ残酷さにぞくり、とさせられる。しかし、だからこそ人は光を放つ。二度とない連続した今を生きるからこそ、人生は美しく輝くと物語は表している。

著者の北村薫は付記にてこのタイトルには「早送り」とともに、「失われることのない軽やかな足取り」という意味が込められていると語っている。その言葉通り、『スキップ』の最大の魅力は主人公の凜とした物腰にあるといえる。時に翻弄され、人生において最も輝かしく幸福な時期を切り取られてしまった17歳の少女に不思議と悲愴感はない。むしろ、「オバサン」の姿になったはずの彼女は生命力に満ち、きらきらと輝いて見える。なぜなら、好きな言葉を聞かれて迷わず「自尊心」と答える誇り高い彼女は、自分の人生を信じている。だからこそ、後ろは向かない。たとえ歯を食いしばっても、顔を上げ前だけを見据えて、軽やかに、颯爽と駆け抜けていく。そんな彼女の姿は過去を悔み未来に惑う私たちの肩をたたき、背中を押す。今自分が立っている場所は昨日でも明日でもなく今この瞬間であり、困難な状況に直面した時にどう生きるかということの大切さを教えてくれる。

時と人、心と体の関係を描いた物悲しくも優しく、じんわりとした温かさを持った美しい物語である。

八木 宏美 『違和感のイタリア:人文学的観察記』

中川 洋子 (文学部3年次生)

イタリアは、日本人にとって一度は行って見たい憧れの国である。愛と美食と芸術の国であり、また、明るくおおらかながちょっといい加減な国民性が、訪れた日本人をいらいらさせる、そんなイメージが日本人の意識の中に定着していると思う。しかし、そういったステレオタイプのイメージを覆し、イタリア人の思考の仕方や、平等や公平、自由といった言葉の意味を違う角度から考えさせるのが本書である。

筆者は、音楽の勉強のために留学したイタリアでさまざまなカルチャーショックに出会い、そのショックの元を作り出したイタリアの歴史、政治、教育制度など、イタリア人の思考を生み出す背景の探求に取り憑かれてしまう。最初は、イタリア人の、他人に対する「不信の文化」に驚いた筆者だったが、それは、長年にわたる他民族による分断支配の中で生まれた、権力に対する抵抗の文化であること、また、教育では、知識よりも社会の中の自己の存在を認識する人文学の視点に重点がおかれること、そして、格差社会を「当然の前提」として受け止め、その格差の中で、個々が自由に人生を選択する権利を「平等」に保障しようとするイタリアの民主主義の理念など、日

本人とは根本的に違う思考の仕方が徐々に解明されていく。

イタリアは、人文学が発達した国である。人文学とは、人間の営みを総合的にとらえ、解明する学問で、それを解明するために個々の学問がある。だから、いくら個々の学問が発達しても、それが有機的に結びつき、人間を理解するために役立たなければ意味がない。レオナルド・ダ・ビンチは、よりよい絵を描くために、解剖までして人体を調べ上げた。彼にとって解剖とは、医学の発達のためではなく、あくまでも人間という存在を表現するためであった。イタリア人の思考や行動は、常に人間と密接に結びついているのである。

また、イタリアは、歴史的に、イタリア人支配による一部の自治都市を除いて、常に法王庁や他民族による覇権争いの対象になり、ずっと分割支配されてきた。次々と変わる権力者から自己を防衛するためには、即座に状況を判断し、臨機応変に対処しなければならない。それぞれ、立場や状況が違えば判断が違うのが当たり前で、意にかなわなければ交渉する。イタリア人にとっては、多様な人間社会に答えが複数あるのは当然のことであり、だからこそ、柔軟な交渉社会が発達したのである。

本書では、イタリア人の思考を読み解く鍵として、教育制度、カトリックコミュニティ、労働組合、フィアット社、第二次世界大戦の顛末、マフィア問題などが取り上げられている。それらはどれも、イタリアの厳しい現実を表している。しかし、また、その厳しい環境の中で、いかにイタリア人が絶妙なバランス感覚を駆使して生き抜いてきたのかがよくわかる。いい加減に見える国民性も、時には不条理に思えることでさえも、人間の多様性を思えば理にかなっているように思えてくる。今、イタリアだけでなく、世界中が厳しい現実と直面している。こんなときこそ、イタリア人の、人に優しい価値観やバランス感覚を学ぶときではないかと思う。読み終わったとき、著者にとって、最初は戸惑いだけだったこの国が、実はとても人間性に富む、愛すべき国に変わっているのを感じ、読者自身も共感しつつほっこりとした優しい気分になれる、本書はそんな一冊である。

伊坂 幸太郎 『終末のフール』

根来 厚志 (国際教養学部2年次生)

小惑星の衝突により、世界終焉まであと8年。そう宣告されたなら、みなさんはどういった行動をとるだろうか。

本書ではそのように宣告され、自暴自棄になった人びとが殺人や暴漢、強盗や自殺など、ひとしきり暴れ回り終末を嘆いた後の世界、生き残った人々が現実を受け

止め平穩に暮らす、小惑星衝突まであと3年から2年半の世界を描いたものである。仙台の「ヒルズタウン」というアパートに暮らす8人が、残りの時をどのように過ごすか選択していく様子を、それぞれの人物からの目線で描かれた8編から構成されている。8編と述べたが、しかしこれは単なる短編小説ではない。それぞれの物語で登場した人物が他の編でも登場し、その人間関係や出会いが交錯する。

具体的にその内容について紹介する。喧嘩別れした娘と仲直りする父。世界が終ろうとしているなか子供を産むか選択を迫られる夫妻。復讐のために元アナウンサーを殺そうとする兄弟。今まで通りの練習漬けの日々を送ろうと決意をするボクサー。首吊りに失敗し、ふとしたことで旧友と会うことになる元サラリーマン。周りの人の悲しみを埋めるため親や恋人、姉妹を演じる元舞台女優。終末の時におこるだろう洪水を見下ろし少しでも長く生きるため、アパートの屋上に櫓を立てる父。彼らは家族が亡くなるなどの悲しみを抱え、終末という見えない恐怖に怯えながらも、終末までの僅かな期間で何ができるかを考え、諦めることなく生きている。また、本書の最後では2年半後の世界については書かれておらず、そのことがさらに見えない終末を引き立たせている。

私は本書を読みつつ、自分の大学生活へと投射していった。あと2年半で私の大学生活は終わり、終末とまでは言えないが、全く想像しえない未知の世界に身を置くことになる。その大学生活の終わりまでの間、私は一体何ができるのかを考えるきっかけになった。本書の中で登場する人物は前の段落で述べたように、様々な最期までの生き方を選択する。その彼らの選択は私自信の選択の手本となり、学生生活が終わってしまうという恐怖からただ逃げるだけでなく、残りの期間で何ができるかを考えるきっかけになった。さらに、これはなにも学生のみには当てはまる話ではない。意識するしないにかかわらず、人は常になにかしらの区切りや終わりに向かって生きている。本書は全ての人に対して、残りの期間で何ができるかを問いかけているように私は思う。

また、本書には各所に「とにかく、生きる」というメッセージがみられる。ただ、ここでいう「生きる」の意味とは、ただ呼吸し、食べ、寝るという意味ではない。前述したように、彼らは何ができるかを考え、諦めずに生きている。そのことを加えると、ここでいう「生きる」とは「生を活かす」という意味であると私は思う。さきほど残りの期間で何ができるかを考えることの重要性を述べたが、考えるだけではいけない。考えた末に出た答えがどんなに無謀に思えても、無意味に思えても、とにかくやってみることが大切だと教えているように思う。ただ終末を恐れて止まっていたら、何も起きない。

冒頭で世界終焉までという非現実を問うたが、今私たちは無意識ながら、まさにそれぞれの終焉に向かって生きている。そのぼんやりとしか見えない終わりまでの間、

みなさんはどういった行動をとるだろうか。

諏訪 哲史『アサツテの人』

松谷 彩可（国際教養学部1年次生）

奇怪な言葉を突如発することで周囲を混乱させ、ついには失踪してしまった叔父を、様々な視点から描いた作品。「私」は、叔父を主人公にした小説を書こうとするが、叔父の抱える苦悩を知ってしまったため、うまく書くことができない。悩んだ末に、叔父に関するエピソードを、いくつか取り上げて説明していくことにした。未完成の小説を、未完のまま書き連ね、説明することで作品をつくりあげていくのだ。従って、これといった結末や大団円も存在しない。本書はこのような形を取ることで、小説における「作為」を意図的に避けるかのように進行していく。

ありきたりな出来事、習慣、一般常識。全てが作為に満ち溢れ、決められた枠の中にある。日常の「定型」や「凡庸」から逃れたい。その反動として「アサツテ」は登場するのだ。作中で叔父は、「ポンパ」だの「タポンテュー」だの、わけのわからない言葉を突如連発する。それは、吃音を克服した叔父が、再び「吃音的なもの」を求めることによって生み出した、「意味を持たない言葉」なのである。

しかし、「アサツテ」を生み出すため意識的に「定型」を作り出そうとしている自分に気づいた時、もはやその「アサツテ」も定型化されていることに気づく。あるいはチューリップ男のような「無作為的なアサツテ」を目の当たりにした時、叔父の「アサツテ」は急速に色褪せていく。

文中、所々に見られる大小様々な太文字や、記号による図示。そして、叔父が発する「ポンパ」などの言葉に対する発音の説明。さらには、ツギハギされたようなちぐはぐな文章構成でさえも、全ては作者が意図した「作為からの逸脱」であろう。これら見え隠れする作者の苦悩が、叔父の生き方と重なって面白く、また、視覚的にも読んでいて楽しいのだ。

しかし、意図的に組み立てられたちぐはぐな文章構成が、一方で一部の読者を置いていってしまうのも事実だ。特に序盤では、なかなか「アサツテとは何か」が見えてこない。結局は「無作為的なアサツテ」であるチューリップ男には勝てないのだ。従って、こういった哲学的内容が好きな人、あるいは叔父に共感できる人でないと、本書を楽しむのは難しいかもしれない。

